

流山市立おおたかの森小・中学校、
おおたかの森センター、こども図書館

正会員 赤 松 佳珠子 殿

正会員 小 嶋 一 浩 殿

流山市は、つくばエクスプレスの開通に伴って都心との距離を一気に縮め、住宅地として急速に発展しつつある街である。しかもそこは、従来の単なるベッドタウンと異なり、恵まれた自然環境や子育て支援施設の充実といった点から積極的に移住を選択する世帯が多いことに最大の特徴がある。このような地域の要請を受けてこの「流山市立おおたかの森小・中学校、おおたかの森センター、こども図書館」は計画された。今後のこども人口のさらなる増加も見越し、延床面積 22,000 m²、最大児童数 1,800 人という極めて大規模な小中併設校が誕生したのである。

これほどの規模の学校において、適切な教育環境は形成できるのか、あるいは成熟していない街のなかで、学校は地域といかなる関係を構築できるのか、さらには今日的な虐めや引き籠りなど、この学校の設計上の課題は山積みである。こうした課題に対してこの作品は、主要構造体である L 形の壁を地域の主風向に配慮して前面道路から 60 度振れたグリッドで配置し、それらが木立のように広がる実に伸びやかな空間で応えている。随所に設けられた特徴的な中庭や森は、その広がりの中かにいくつもの特異点をつくり出し、また L 形の壁が適宜家具や建具と組み合わせられることで、教室としての独立性と、多様な教育に応えるオープンスクールとしての可変性も同時に獲得している。さらにどの教室からも自由に入出入りすることのできる大きなバルコニーは、緻密に開発された全開放の建具と相まって、内外構わず走り回れるような開放的な環境を生み出している。このように、一つの小さな社会空間の中かに自らの居場所を見つけていくことのできる安心感は、こどもたちにとって掛け替えのないものに違いない。さらに、地域開放施設がポケットパークのような外部空間をつくりながら通り沿いに並び、地域と学校が穏やかに見守り合う関係性を築いているのも、幸福な光景である。

この土地のシンボルでもあるおおたかの森の生態系を保存すべく、建築は可能な限り距離を持って配置しながらも、建物のどの場所からも、この森や周辺の街並が感じられるような開放的な空間が実現されていることは、この規模を思えば驚くべきことである。しかも、家具的なスケールから都市的なスケールまでを極めて高い完成度で実現している様は、見事である。今後、学校建築を語るうえで常に参照され、また語り継がれていく建築であることは、間違いない。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。



2011年のプロポーザルで選ばれた、千葉県流山市おおたかの森地域の最大約1,800人の子供たちが通う小・中学校併設校と地域交流センター・こども図書館・学童保育所が集う、約22,000㎡の大規模な複合施設です。

建物は卓越風の向きと太陽の動きを考慮し、町の軸線から60度傾けた配置とすることで豊かな自然、光、風を最大級に取り込みます。敷地全体に連なる中庭の木立や、緩やかな輪郭のファサードによって、まちの緑が住宅街からおたかの森の「市野谷の森」へ繋がっていきます。

教室ゾーンは、L型の壁を離散的に配置することで子どもたちの居場所を創り出します。ワークスペースや落ち着きのあるコーナーを大切にしながら、フレキシビリティを持った空間構成としています。広いデッキや全面開口折戸によって、内外の境界なく学校全体が子どもたちの活動の場となります。

地域との接点になる「アクティビティホール」「音楽ホール」「ランチルーム」は街に面して配置し、活動を表出させます。「こども図書館」は建物の中央に配置し、小学生と中学生、地域の人々の動線の結節点として交流の場になることを意図しました。動線のスパインである「風のみち」は街と森を繋ぐように通され、積層された「体育館」、森を切り取ったような「森のにわ」、「遊びのにわ」、これらのスケールや様相の違う空間が、面的に拡がるL壁の教室群のなかに現れて、大規模な建築に深度を与える。曲面を描くデッキテラスや木々の間から子どもたちや地域の人々の活動が見え隠れし「木立の広がり」にアクティビティが見え隠れする、風と光に応答する建築が実現できた。

DATA

所在地	千葉県流山市	主要用途	小中学校
敷地面積	38,530㎡	延床面積	22,000㎡
構造	鉄筋コンクリート造	一部鉄骨造	プレキャストコンクリート造
規模	地上3階	竣工	2015年3月



